The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「やっぱり」についての一考察 ： 「一致説」への反論
Author(s)	金谷, 由美子
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 183-193
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69227
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「やっぱり」についての一考察－「一致説」への反論－

金谷由美子

1. はじめに

本稿は、従来の「やっぱり／やはり／やっぱ(P)」[注1]（以下、「やっぱり」で統一する）に対する多くの研究者の統一的な見解である「(Q) やっぱり (P)」において、「やっぱり」のはたらきは、「P に先行する Q が P に一致することを示す」という説（以下「一致説」と呼ぶ）に異義を唱え、「やっぱり (P)」は発話の前の段階で「P でない可能性も考えた」ことを示す談話標識であることを主張する。尚、¬P OR P という選択肢がただ存在するのではなく、発話の前段階で「迷い」が多少なりともなければならない。逆に、「やっぱり」を使用することによって¬P OR P という迷いがあったことが聞き手に伝達される、あるいは、あった振りをすることができると考える。これを、図式化してみる。

図１

¬P OR P → 「やっぱり (P)」

一致説による蓮沼(1998)の図式 $P \rightarrow (P_1P_2 \cdots P_n) \rightarrow$ やはりP との違いに注目されたい。一致説では、直前の文脈が「Pではない」場合、それを飛び越えてPと一致する「P」、即ち、多くの先行研究で設定しているPと一致する何らかの「先立つもの」（本稿ではQで統一する）を聞き手は探すことになる。「一致する」とは、必ずしもPとQが同じ命題を持つという意味ではなく、Pが「期待通り」であるときの「期待」がQである場合（森本1994）、「やっぱり」のはたらきを、「前提命題（Q）と当該命題（P）の適合の再認識・確認」であるとする場合（蓮沼1998）、Pが「既製の観念（Q）と一致する」とする場合（加藤1998）、Pという結論に到る「前提」がQである場合（西原1988）もある。また、発話解釈のため導入される「Pと矛盾しないassumption（想定）」がQである場合（Tanaka1998, Sasamoto2006）もある。それに対して、本稿は、このような先立つQが「やっぱり」文の解釈に必要ではないと考える点や逆接文における「やっぱり」の使用の説明にQを用いない点において大きく異なる。

第２節で先行研究における一致説を概観し、第３節では一致説の問題の発端と思われる逆接的な「やっぱり」文を取り上げ、逆接文における「やっぱり」の用法を積極的に認めることを提案する。第４節では、本稿の主張による「やっぱり」の統一的な説明を試みる。

2. 先行研究における「一致説」

これまでいろいろな立場から「やっぱり」が論じられてきたが、「やっぱり」は、①話し手の主観的態度を表わすものであり[注2]②なんらかの先立つもの Q と「やっぱり (P)」の命

題 P が「一致」することを表わし③「やっぱり」文の解釈には、話し手と聞き手の間に背景的知識が共有されなければばらない、という共通見解が見られる。

2.1 話し手の主観的態度

①については、「モダリティ」という用語との関りを押さえておく必要がある。というのも、Maynard (1993)など、「やっぱり」等の副詞類を「モダリティ」を表わすものとして捉える研究があるからである。そして、このような研究においては、話し手の「主観」と「モダリティ」がほぼ同義のように使用される傾向にある。

「やっぱり」は、中右（1980）・高見 (1985)で、文照応形の先行詞から外れる副詞を「命題外」であると説明しているものにあたる。

（1）「やっぱり安田は、その言葉のとおり、《まりも》で到着しているのであった。
　　三原はφ失望した。」（高見 1985）
（2）「花子が何度も聞き返すので、太郎は{それに／φ}うんざりした。」（高見 1985）

「命題外」というのは、（1）のように、先行詞を、「φ」や「それ（そう）」で受けた場合に、その命題の中に「やっぱり」が含まれていないことを意味する。それに対して、(2) のように、「何度も」が含まれる場合を「命題内」であるという。文が命題とモダリティで成立していると考える中右（1980）の立場では、副詞類も、基本的に「命題外」のものは話者指向、即ち、命題に対する話し手の心的態度を表わすものとされる。心的態度の中には、（ⅰ）価値判断（例：運悪く）、（ⅱ）真偽判断（例：多分）、（ⅲ）発話行為に関るもの（例：ちなみに）がある[注3]。

本稿は、「やっぱり」が、文の命題には作用しない何らかの別の役割を果たしているという見解に反対するものではない。しかし、命題外だからと言って、必ずしも「モダリティ」や「主観」を表わすものであるとは考えない。「やっぱり」は、「きっと」や「おそらく」のような蓋然性モダリティを表わすものでもなく、「幸い」「残念ながら」のように話し手の命題に対する「評価」を表わすものでもない。「せっかく」や「さすが」のように、渡辺 (1980)が「見越しの評価」と呼んだ事態に対する何らかの話者の評価を含んだ副詞類とも異なると考える。本稿では、「やっぱり」は、¬P か P かという「迷い」があったことを聞き手に伝達する談話標識であると考えるため、「やっぱり」自体が話し手の命題に対する主観的態度を表わすという考え方はとらない。先行研究で度々議論されてきた「控え目」や「傲慢さ」等の意味は、文脈と「やっぱり」のはたらきが相まって二次的に表されるものであると考える。関連性理論の立場の研究（Tanaka1998, 武内 2003・2015, Sasamoto2006) では、多くの先行研究の問題点として、「やっぱり」に記号化されている意味と、語用論的推論によって表わされる意味とを厳密に区別せずに論じてきたことを指摘しているが、本

稿もこれに同意する。

2.2　P に先立つもの Q と背景知識の共有

次に、一致説の根幹である②P に一致するなんらかの先立つもの Q の存在、そして、その理解のために必要な③聞き手による背景知識の共有、についてみる。一致説は、(3)〜(6)のような用例に基づいて直感的に導かれたものであると思われる。

(3)　「（他の誰かも反対している）私も、やはり反対です。」（加藤 1998）
(4)　私がもどってきた時、彼はやはり本を読んでいた。（岡村 1982）
(5)　A:「あの二人結婚するんだって。」B:「やっぱり。」（武内 2015）
(6)　「やっぱりプロの絵かきは違うねぇ。」（飛田・浅田 1994）

このような「やっぱり」は、辞書類を中心に、(3)「〜と同様に」(4)「依然として」(5)「思った通り」(6)「さすが」等と言い換えられるという説明が度々なされてきた。すべて、P と一致する「文脈上の何か」や「話し手の予想」等が P に先立ち存在する用例である。しかし、実際には本稿の用例のうち、下記で見る (7)~(15)のように P と前文脈との一致では説明できない「やっぱり」が数多く存在する。多くの研究者が、一致を「やっぱり」の中心的な意味であると直感的に認めてしまったがために、一致する前文脈を持たない「やっぱり」の説明において、P に一致する Q を、言語化されていない広い文脈や一般常識に求めるという方策を取らざるを得なくなった。その結果として、「やっぱり」を含む発話の解釈のためには、話し手が P という結論に至った膨大な背景知識を聞き手が共有しなければならないという説明③が広く受け入れられることになったのである。

3.　逆接文における「やっぱり」

3.1「一致説」の問題点

本稿においては、一致説の問題点を次のように整理する。①一致説では、先行する Q と P が矛盾してはならないため、前文脈との一致では説明できない用例のうち、前文脈と P が相容れない逆接文での使用を説明する過程において、「やっぱり」の「作用域」[注4] を文脈外や一般常識に拡大するという方策がとられた。②①のような説明における Q は、結局のところ、P に到った話し手の根拠にほかならないが、それは、「やっぱり」文を解釈するために必要な、解釈過程に導入されるべき「想定」とまでは言えない。

森本(1994)は、基本的には「やっぱり」を「期待通り」であることを表わす語であるとした上で、実は「やっぱり」の表わす「期待通り」はもっと複雑であると言う。

(7)「結果はどうでしたか？」と尋ねられて：

「行けるかなと思ったんですが、やはりだめでした。」

・・・中略・・・

言語化された期待（＝行けるかなと思ったんです）は、「やはり」の使用とは、直接の関係があるとは限らないことがわかる。「やはり」を使うのに関与する「期待」とは、言語的にはっきりと述べられてはいないが、話し手の心の中にある何かである。ここで可能な解釈は、その「期待」は、この言語的文脈自体から引き出されるものだけでなく、話題になっているものについての話し手の見解、社会的に認められた知識、慣習といったものをふくむ、一般的な原則のようなものだということである。たとえば、上の場合、話し手は、自分では成功を望んだが、自身の能力などについての総合的な理解から、失敗が予想されていたと想定するのである。

（森本 1994）（波線は筆者による）

一致説に従うと、 (7)では、例えば、「私の実力ではこのテストに受かるわけはない」という常識的 Q が発話に先行して存在し、それが P と一致するのだという説明になる。そして、そのような Q に聞き手を誘導するのが「やっぱり」の機能であるという説明が、立場の違いはあれ、多くの研究者によって受け入れられてきた（板坂 1971, 岡村 1982, 西原 1988, 森田 1989, 日本語構文研究グループ 1991, Maynard 1993, 森本 1994, Tanaka 1998, 蓮沼 1998, 曹 2001, 武内 2003・2015, Sasamoto 2006）。

本稿の立場では、(7)の「やはり」も、「結果は良いかもしれないし、良くないもしれない」と話し手が思っていたことを表わしていると考える。また、ここで森本の言う常識的 Q は、話し手が「良くない結果」を思い描くにいたった根拠に対する聞き手の想像であると考える。Q は P に到る根拠なのであるから、当然のことながら P と内容的に矛盾しないものとなる。しかし、このような説明には無理があるように思われる。

問題点を三つ指摘する。一つ目は、直前の言語化された文脈が P と矛盾するときだけ Q の範囲を広い文脈や言語外の一般常識にまで領域を広げている点である。二つ目は、例えば(7)で言語化されている話し手の「良い結果に対する予想」に対しても、聞き手はおそらく「手ごたえがあったんだろうな」等、その発言の根拠を思い描くだろうが、それについては一切触れられていない。最後に、そのような話し手の P に関する根拠 Q が聞き手にとって発話の解釈に必要な「想定」とまで言えるだろうか、という疑問である。話し手の発話の根拠が聞き手にとって不明瞭であることは珍しいことではない。根拠が不明瞭だからと言って、発話が理解できないということにはならないのではないだろうか。

逆接文における「やっぱり」について論じた曹 (2001)は、(8)のような逆接文の例においても、順接文と同様に、P に一致する Q が「言外の前提」として存在していると説明する。

(8)人が一緒にいれば、意見の食い違いや面倒なこともあるとは思いますが、やっぱり

家族が一緒に住むことは、かけがえのないことだと思うのです。（曺 2001）

直前の言語化された文脈から推論により導きだされる結論は、「人（家族）と一緒に暮らす」ことへの否定的な見解であり、続く P の「家族が一緒に住むことは、かけがえのないことだと思う」とは相容れない。なぜ、P だと考えるのかについての説明は前後文脈に存在する場合もあれば、しない場合もあるだろう。(8)の場合は、前後文脈が無いため判断はできないが、いずれにせよ、話し手が P に到る背景や根拠は、特に言語化されない限り、多くの場合、聞き手にとって想像の域を出ないのではないだろうか。話し手が P に到る背景や根拠は、必ずしも発話の解釈に必要な「想定」であるとは言えないはずである。

3.2　「やっぱり」の意味変化と逆接文

蓮沼(1998)は、「やっぱり」の意味変化を通時的観点から研究することを提案している。「やっぱり」の「動かさないでそのままにしておくさま、静かにじっとしているさまを表わす語」（『日本国語大辞典』）という語源的な意味は使用されなくなって久しい。語源に比較的近いと思われ、辞書類には掲載されている（4）のような「依然として」「もとのまま」の意味用法も、古い小説でしか見られない。（3）のような「～と同様に」「も、また」に代わる累加用法も口語ではあまり使われなくなっている。また、本稿の用例だけを見ても、使用文脈や場面は一律ではなく、図 1 で説明したはたらきが形骸化したフィラーに近い使用（4.2，4.3）も多い。蓮沼(1998)の指摘通り、「やっぱり」の意味が、命題的なものから、そうではないものへと変化してきたことは間違いないだろう。

その一方で、古い用法が一致説を支持する根拠となり、逆接文における「やっぱり」の使用に対する認定を阻んでいる可能性がある。語源の「じっとしている」「そのまま」から、「依然として」「～と同様に」までの流れに比べ、逆接文での使用は一見飛躍があるように見えるかもしれない。ところが、類似の現象が他言語でも観察されるのである。例えば、英語「still」[注5]はゲルマン系の語彙で「じっとしている」「静か」が語源だが、現代英語では、副詞として「なお、依然として、相変わらず(例：She still stood there.)」「（比較級とともに）いっそう、さらに（例：still better)」のように使用されるほか、また、「それでも、それにもかかわらず（例 : He had many faults, still she loved him.）」のような逆接的な接続副詞的用法も珍しくない。このような多義化の方向は、「やっぱり」だけでなく、古語「なほ」[注6]・古語「また」や、中国語の「还（還）hai／还是 haishi」とも偶然とは思えないほど平行している。（英語用例は、『リーダーズ英和辞典』より）

例えば、『小学館中日辞典』の「还是 haishi」の用例を見てみる。（意味解説や訳文は辞書のまま、下線は筆者による。）

①副詞：やはり、依然として、あいかわらず、もとのまま

（ⅰ）他已经六十多岁了, 身体还是那么健壮。彼はもう 60 歳を過ぎているのに、体は相変わらずあのように達者だ。
（ⅱ）这次还是他做向导。今度も彼が案内してくれる。
虽然, 尽管, 即使 など（逆接の副詞）と呼応して
（ⅲ）虽然走了一些弯路,试验还是成功了。多少回り道をしたが、実験はやはり成功した。
（ⅳ）尽管上了年纪,他还是每天坚持长跑。年を取っても、彼は相変わらず（毎日）頑張ってマラソンを続けている。（「毎日」は筆者が加筆）
②副詞：（比較や選択をし、よりよいほうを示す）やはり
（ⅴ）还是你来吧, 我去不方便。やっぱり君に来てもらおう。僕が行くのは都合が悪い。
③接続詞：それとも
（ⅵ）你上午去, 还是下午去？　午前に行きますか？それとも午後行きますか？

中国語では、①の用例（ⅲ）（ⅳ）のように、接続副詞を文頭に持つ逆接文の主節で副詞が要求されることが多いが、そこに「也 ye」や「还是 haishi」のような並列的な意味で使用される副詞が頻繁に使用される。また、「依然として」（ⅰ）、「累加」（ⅱ）、「選択」（ⅵ）、「比較」（ⅴ）、「逆接文での使用」（ⅲ）（ⅳ）という多義化が、共時的に見られる点で興味深い。

古代の漢語由来の韓国語「역시（亦是）yeoksi」も、日本語では使われなくなった累加的な使用（「私（も）、亦是知らなかった。」『エッセンス』）が、文語だけでなくニュース原稿でも頻繁に使用されるほか、「やっぱり」に非常に近いはたらきを一部持っている（「亦是あいつの仕業だった。」『Prime』、「亦是あなたが一番よ！」『エッセンス』）。その一方で、日本語のような逆接文での用法は、ほとんどの場合不適格とされ（「*受かると思ったけど、亦是不合格だった」）、談話機能が中心の用法も不自然である（お茶しようと誘われて、「*遅いから亦是帰るわ。」）ことも興味深い。さらに、累加と逆接の関係という観点から見ると、日本語の「も」や、「も」に非常に似たはたらきを持つ韓国語の「도 do」が、共に、逆接的接続助詞や接続詞の一部として使用され文法化していることは注目に値する。

このように、①並列的表示がしばしば逆接的な接続を表わすようになること、②「依然として」「もとのまま」を表わす語が、並列的用法（累加・選択）や比較の強調用法を持つようになること、③①と②が同じ語で生じる場合があることは、通言語的に見られる現象である可能性がある。「やっぱり」の逆接文における用法を、そのまま積極的に認めるべきだと考える理由のひとつである。

4.　本稿の主張による説明の試み

次に、本稿の立場にたって、これまで見たタイプ以外の「やっぱり」の用法を見てみる。

4.1　迷いの場面での「やっぱり」

(9)～(12)は、すべて話し手の「迷い」が事態の中心である場面で用いられる例である。

(9)色と形を兼ね備えたものがなかったので、やっぱり何も買いませんでした。

Sasamoto (2006)の用例

(10)レストランでセットの飲み物を尋ねられて：（作例）

a.「紅茶。あ、やっぱり、コーヒーにします。」

b.「コーヒーで。（時計を見て）あ、やっぱり飲み物はいいです。時間もないし。」

c.（少し迷ってから）「やっぱりコーヒーにします。」

(11)車に乗っていて、当初の目的地とは違う場所で急に降ろしてくれと頼む場面：（作例）

「ごめん、やっぱりここで降ろしてくれる？」

(12) A:「ちょっと寄ってお茶でも飲んでいきませんか。」

B:「やっぱり、やめときます。」（蓮沼 1998）

Sasamoto(2006)は、(9)に関して、一致説に基づき、母語話者なら「もともと買うつもりがなかった」ことを直感的に解すると説明しているが、そう言いきれるだろうか。それよりも、「何も買いませんでした」という P に対して、「買う」という¬P の方向でもあれこれ迷ったことを表わしていると考える方が自然である。「あれかこれか」「するかしないか」等、二者択一の場面で「やっぱり」は使用される。(9)では必須とまではいえないが、(10a) (10b)では選択を変更する場合に挟む談話標識として「やっぱり」は欠かせない。このような直前の選択を打ち消す場合の「やっぱり」は、P がその時点における最終決定であることを聞き手に示すと同時に「迷い」があったことを聞き手に伝える効果を持つ。「迷い」は聞き手を待たせたり相手に変更を余儀なくさせたりするが、「迷い」を伝えること自体が言い訳になり得る。例えば、(10c)では、「やっぱり」を挟むことによって、待たせたことに対する軽い謝罪をしたような効果が生まれる。(11)の場合は、言語化されていない「ここで降りるか、目的地まで行くか迷っていた」ことが「やっぱり」の使用によって伝達されるため、運転者に対する唐突な依頼の無礼さを低めることができると考える。

このような、「迷い」を伝えることによる「やっぱり」の語用論的な意味については、これまでにも言及されてきた。蓮沼(1998)は、(12)における「やっぱり」の使用を、相手の誘いに乗るかどうかについて「熟慮の姿勢を装うことによって、相手の意向に沿わない結論を述べることに対する遠慮やためらいの態度を表わそうとしている」と説明している。まったく同感である。しかし、今までは、このような談話機能は、「やっぱり」の意味の一部である「いろんな可能性を考えた」ことを表わす機能よって説明されるとしてきた。本稿では、むしろ、この部分が「やっぱり」の基本的なはたらきであり、(12)の談話機能も P に先立って¬P も考慮したという「やっぱり」の基本的なはたらきと文脈から二次的に生じるものであると考える。

4.2　議論中の「やっぱり」

語用論的に説明されるはたらきのうち、しばしば議論になってきたのが、「やっぱり」が表わしている話し手の態度は控え目なのか傲慢なのかという問題である。Sasamoto (2006) による傲慢に聞こえる例(13)を見てみる。

(13) Mary は　Peter にイギリス Salford 地区の治安対策について意見を述べる：
Mary:「若者は何かすることが必要です。やりたいことで忙しいと、反社会的行動を取る暇はないはず。」
Peter:「いや、やはりそれはうまくいかないと思う。警察官を増員すべきだ。」
（Sasamoto 2006）

Sasamoto (2006)は、この「やはり」が想定として導入する Q が、社会や自分以外の人に帰属するものではなく、話し手自身の個人的な主張であるため多少傲慢に聞こえると説明している。言い換えると、話し手が主張 P をするに到った想定 Q が、個人的な意見であるため傲慢に聞こえると言うのである。しかし、本稿では、「やっぱり」が聞き手の解釈過程に想定 Q を導入するはたらきを持つとは考えない。ここで「やっぱり」がしていることがあるとすれば、話し手が「あなたの説についても一応考慮に入れた」あるいは、その「振り」をしていることを伝えていることである。それでも敢えて「あなたの説はうまくいかない」という結論 P を述べることになるため、強い主張に聞こえるということではないだろうか。

議論における「やっぱり」は、自らの意見 P ではない可能性も考えたとことを伝えるため、基本的には躊躇を表わす表現（hesitation marker）である。多くの場合、意見を述べることへの「ためらい」や「遠慮」を表わす緩衝表現（hedge）として使用されているとみるべきであるが、このような相手の意見を否定する場面では、むしろ、押しが強く傲慢に聞こえる。「控え目」と「傲慢」のように、相反する態度が同じ「やっぱり」によって表出されるのは、「やっぱり」自体にこれらの主観的態度が含まれているのではなく、「やっぱり」の基本的なはたらきと文脈が相まって生まれる二次的な意味であるからだと考える。

4.3　前置き的な「やっぱり」

4.2 の議論における「やっぱり」が更に形骸化し、「P でない可能性も考えた」という「熟考」感の薄い、前置き的な「やっぱり」の使用が見られる。

(14) 進路指導の面談中に生徒から教師に向かって：
「やっぱし、勉強は好きじゃないし、だからやっぱし就職の方がやっぱしいいかなって。」
（飛田・浅田 1994）

(15) インタビューで、「好きな女性のタイプは？」と尋ねられた相撲取りの答え:
「やっぱり、おしとやかな、着物のよく似合う人がいいね。」　（金田一 1962）

このような形骸化した「やっぱり」に多少なりとも違和感を覚えたというのが、金田一(1962)が「やっぱり」を取り上げたそもそもの理由であった[注7]。「中には、読者から見ると、ちっとも“やはり”ではなさそうに思えるものもある」というコメントが、それを示している。しかし、(14)(15)のような場合も、「迷った」「考えた」「そしてPを選んだ」ことを伝えるというはたらきが多少なりとも残存していることから、「あの〜」や「え〜」のようなフィラーとは、区別されるべきである。

4.4 「やっぱり」が使いにくい場合

加藤薫(1999)は、「ブルータス、おまえもか。」のような驚いた場合に「やっぱり」が使いにくいことを指摘している。Maynard (1993)が指摘するように、出火に気づいた最初の瞬間に「やっぱり火事だ！」というのはおかしい。Maynard (1993)は、これを、「やっぱり」の使用には、通常聞き手を含む談話の参加者が皆一定の情報を共有していることが必要である例として挙げているが、そうではないだろう。「やっぱり火事だ！」という発話がなされた場合は、発話以前の段階で、話し手が「きな臭い」「煙が見える」等の火事の兆候を感じとり、「火事かもしれないし、そうでないかもしれない」と考えていたことを示すことになる。そのため、最初にPに気づいた瞬間には使用できないが、聞き手がその情報を共有していることは必ずしも必要ではない。聞き手が火事の情報を共有していない通話中の相手であったとしても使用は可能であり、その場合、聞き手は「やっぱり」から、話し手が発話の前段階で火事について何らか情報を得ていたことを知ることになる。

5. まとめ

本稿では、Pに一致するQが言語内にみつからない逆接文の場合に、無理にQを探そうとした点に従来の一致説の問題の発端があると考えた。一致説におけるQは、詰まるところ、Pの根拠であるが、発話の根拠が聞き手の解釈過程に必要な想定であるとまでは言えない。そのため、聞き手が話し手と膨大な知識を共有していなければならないとも考えない。「やっぱり（P)」は、発話の前段階で「Pでない可能性」も考えたことを示す談話標識であるという本稿の考え方に立てば、「やっぱり」が逆接文で使用される場合にだけ「作用域」を広げる必要はない。通言語的に平行する現象があることに鑑みると、逆接文における「やっぱり」は、それ自体が積極的に認められるべき用法であると思われる。

注

注1：（P）になっているのは、実際の発話では、用例(5)のように、命題Pが言語化されない場合も多いためである。

注2：主観は語用論的に説明される（二次的に表わされる）ものであるという見方も含む。

注3：そのほかのものについては、中右（1980）にも迷いがあり、（iv）領域指定（例：基

本的には）については、命題外と言い切れるかどうかについて、（ｖ）接続副詞（例：したがって）については、「命題外」ではあるが「モダリティ副詞」には含めないとしている。

注 4：西原(1988)によって導入され、説明の仕方は多少異なるものの、多くの研究によってその基本的な考え方が踏襲されていると見ることができる。

注 5：川口（1992）では、「still」と「なほ」の関係、金水 (1992b) では「still」と「やはり」の類似性についての言及がある。また、川口（1992）は、「なほ」や「やはり」の考察において、cross-linguistic な視点を導入することを提案している。

注 6：古語「なほ」については金水 (1992a)に詳しい。

注 7：加藤(1999)によれば、一連の「やっぱり」論は金田一(1962)が始めたものである。背景知識の共有を伴う「一致説」も、元をたどると、金田一（1962）が、「やっぱり」「さすがに」「～だけに」について、「自分の言うところは一般法則にあっている、その例外ではないという意味で愛用されるものであろう」と解説したことに端を発していると思われる。

《参考文献》

板坂元 (1971)『日本人の論理構造』講談社

岡村彰子(1982)「『あいかわらず』と『やはり』」日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店

加藤薫 (1998)「『やはり』に先行するもの」『文化女子大学紀要：人文・社会科学研究』第 6 号: pp.97-107.

加藤薫 (1999)「『やはり』論の問題点 －その対立する論点の整理と展望－」森田良行教授古希記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』明治書院

川口順二 (1992)「金水氏の『なほ』の考察について」つくば言語文化フォーラム編『対照研究第二号　発話マーカーについて』筑波大学・つくば言語文化フォーラム

金水敏 (1992a)「副詞『なほ』について」同上

金水敏 (1992b)「『なほ』に関する補説－川口氏にお答えして－」同上

金田一春彦 (1962)『日本語の生理と心理』至文堂

曺再京 (2001) 「順接と逆接の論理からみた『やっぱり』の機能について」『言語科学論集』第 5 号：pp.37-48.

高見健一 (1985)「日英語の文照応と副詞・副詞句」『言語研究』87：pp.68-94.

武内道子 (2003)「手続きの記号化：『やはり・やっぱり』の場合」『語用論研究』5 : pp.73-84.

武内道子 (2015)『手続き的意味論―談話連結語の意味論と語用論』ひつじ書房

中右実 (1980)「文副詞の比較」国広哲弥編『日英語比較講座第 2 巻　文法』大修館書店

西原鈴子 (1988)「話者の前提－『やはり（やっぱり）』の場合－」『日本語学』7-3: pp.89-99.

日本語構文研究グループ (1991)『日本語、こんなときどうする？　vol.Ⅱ　副詞篇』

蓮沼昭子 (1998) 「副詞『やはり・やっぱり』をめぐって」吉田金彦編『ことばから人間を』昭和堂 pp.133-148.

飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂
森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』角川書店
森本順子 (1994)『話し手の主観を表す副詞について (日本語研究叢書 7)』くろしお出版
渡辺実 (1980)「見越しの評価『せっかく』をめぐって」『月刊言語』Vol.9　No.2: pp.32-40.
Maynard, Senko K. (1993) *Discourse modality: subjectivity, emotion, and voice in the Japanese language*. John Benjamins.
Sasamoto, Ryoko.(2006). "Japanese discourse markers and the communication of emotions-linguistic semantics and pragmatic inference" *Linguistics Proceedings*: Oxford: University of Oxford.
Tanaka, Keiko (1998) "The Japanese adverbial *yahari* or *yappari*" *Relevance theory: applications and implications*. eds. R. Carston, N. Song and S. Uchida, pp.23-46. Amsterdam: John Benjamins.

《辞書類》

旺文社 (2011)『全訳古語辞典』第 4 版
研究社 (2012)『リーダーズ英和辞典』第３版
小学館 (2006)『精選版日本国語大辞典』
小学館 (2003)『中日辞典』第 2 版
斗山東亜 (1994)『Prime 韓日辞典』初版
民衆書林 (2003)『エッセンス国語(韓国語)辞典』第 5 版